

<総評>

自然物としての人間、肉体としての人間が、その本質に逆らって対峙しなければならない事柄が増えてきた気がします。生存条件がギリギリの線を越えようとしている戦争の時代が影響しているのかも知れません。今月はそういう身体を表現する作品を気にかけてながら選びました。

もう来ないでと言う

素麺を茹でながら

---

亀山こうき 千葉県

——断絶の確かさを、最も日常的なそうめんを茹でるという動作が確実に裏付けている。

約束をしない小指で叩かれる

Back space キー

離島めいて

---

白野 新潟県

——キータッチの最も遠い処にある Back space キー。打つには指をうんと伸ばさねばならない。その遠さ、離島めいて。

梟のおともだちならしょうがない

---

松下 誠一 東京都

——別に意味も理由もないがしょうがないことはある。梟のあの謎めいた表情に紐づけられているというだけで。柔らかいタッチが魅力の作品。

全員が裸眼で眠る冬銀河

---

奎いう子 佐賀県

——冬銀河はきっぱりと裸眼で見る。眠りの中でさえ煌めくから。

ことばから旅立ってゆく

花を脱ぐように

あなたはここへ生まれた

---

こはくいろ 大阪府

——生まれ変わるという行為は、既知のことばという花びらをもいで置き去りにすることでもある。「花を脱ぐ」という表現が瑞々しい。

夕暮れの〈帰れチャイム〉に

囲まれて

僕らは大人にならざるを得ない

---

マズルカ 山口県

——山寺の鐘やカラスの声に代えて新世界へのいざない。ほかに行くところは無い。

音速を声は超えられないんだよ

これほど文字が喋らなくても

---

辻村陽翔 北海道

——本来文字は自由奔放な声を響かせていたものだが、記号化あるいは騒音と共にしゃべらなくなった。言葉の多面的な姿。

たすけての曲線にゆるく腰かけて

立てもしない 座れもしない

---

うろ仔 北海道

——少しでも動くとき落ちこぼれてしまう、物理的にギリギリの線にいる人が何と多いことか。

おれたちは水にはなれないで

ただ国とか市とかに関係がある

---

森 榮太 東京都

——人は水と同じ自然物であったのに、現代では囲われなければ生きていけないのか。大きな問題がそこにある気がする。

深海で泳いでいるもんだから

みんな毎日ひしゃげていくの

---

橋詰 桜京 東京都

——日々増していく圧力。すべての人が逃れることができない。

親指で

あなたに送る文を打つ

すみだまりなど作るつもりで

---

志夢 神奈川県

——メールだろうとラインだろうと想いの籠った文は、水茎鮮やかな墨書と変わるものではない。「すみだまり」が仮名で新鮮。

柔らかいうちに沢山触りたい

棺の中の頬は硬くて

---

中原紘 山口県

——親しい者の身体は心と共にあり変わることがないという実感。ただ徐々に体温や柔らかさが失われていくだけで。

月光を遡れずに透明な

くびれを持って余す砂時計

---

常田 瑛子 山口県

——不可逆的という言葉が体現する砂時計。砂に月光のきらめきを引き攫って。

付ける程

共感性の無い筋肉

---

織田 航平 北海道

——貯筋などという言葉がはやる昨今。付いてしまえば別に自慢するようなものではない。